

シベリア抑留記

島根県 増田宗人

戦争が終って六十年、私はシベリア抑留生活をして多くの戦友達が次から次へと死亡する中において、文字どおり九死に一生を得て帰国できたことが今でも夢のように思われてなりません。抑留当時の記憶は八十歳に達した現在、地名、年月日など当時の事は忘れ、思いも遠く薄れる中にあっても、あの刃物で身を切るような寒さ、食べたくても食べる物の無い空腹、その上に強制労働の苦しみの三重苦に耐えることができず、多くの戦友が息を引きとった。死ぬる寸前に苦しい中に微かな声で「お母さん」の名を呼びつつ息を引きとった悲しい姿は、今でも私の臉に焼き付き、忘れることはできません。私の長い人生の中で一番悲しい悪夢です。

私は昭和十八（一九四三年）十八歳の若さで兵役

うよう命令が出た。集結場所は忘れた。その時初めて敗戦を知らされました。

日夜強行軍の途中、体力が尽きて多くの戦友達が倒れ、いまだに消息は不明です。

着いた所は既にソ連軍が進駐しており、在満の多くの邦人の女子供が泣き叫ぶ姿を見て、目を覆いたくなくなった。敗戦のみじめさをまざまざと見せつけられ、軍人としての無力さが残念無念でならなかった。その場におった者ではないと分からないう、言葉に表わすことのできない状態でした。この地で武装解除、あらゆる武器を山積みされた姿は今でもはつきり私の目の前に浮かびます。そして誇らしそうなソ軍の兵隊の姿を忘れることができません。

そして一カ月ぐらいソ連兵の監視下で広い畑にテントを張り、生活が始まりました。食糧、水も充分でなく、体は痩せ細り、髪、鬚は伸び放題、入浴もできず顔、目は鋭く、空腹のため食べ物をあさる姿は獣同然の顔になってゆく。まだ内地に

志願をして関東軍旧満州（現中国東北部）虎頭第四国境守備隊の一員として警備の任に当り、その後は満州国内を転々としました。

終戦の年は公主嶺に新設された挺進奇襲部隊に配属され訓練を受けている最中、八月九日、日ソ戦が開戦され私達の部隊に動員令が発令された。南下するソ連軍を食い止めるため敵の戦車の進入防止手段として野戦陣地構築を命ぜられた。今では考えられないスコップを使った手作業で、一兵の力によって進められていくのです。昼間は敵の飛行機が低空に飛び作業ができずほとんど夜間作業です。八月の満州の気候は、昼は焼け付くような暑さ、夜は身を震わすような寒さ、その上に蚊の大群が容赦なくおそってくる。二十歳代の若さの私達に十分な食糧もなく、空腹と暑さと疲労での作業、戦友の顔はどす黒く青白く、でも働き続けた。八月十五日の終戦も知らず、お互いが励ましながら汗とあぶらの中で働き続けました。

八月二十五、六日頃と思うがソ連軍の指示に従

帰れる楽しみと夢があるために頑張る毎日でした。九月中旬頃と思いますが、ソ連の赤色をした貨車に寿司詰めに乗せられ、外鍵をかけられ食糧も水も与えてくれないのです。でも内地に帰れる望みをかけて我慢した。しかし私達には何一つ知らされることなく、貨車は北へ北へと進み満州里を過ぎソ連領内に入ったのです。時は十月、降る雨は冷たく雪まじり。広い平原の白樺の木に吹きつけられる風も冷たく淋しく帰国の夢は消え、誰一人として言葉もなく、なされるままの心境は今思い出しても涙が流れます。

帰国の夢も消え去り、食物も水もとぎれる日が何日も続いたと思います。時は十月半ば見る風景は異国の地、たとえようのない寂しさと不安は絶頂に達した。到着した所はソ連領内の奥深く、後で地名が分ったが「ピースク」という所です。広い平原の中に建てられた収容所は、周囲は鉄条網で囲い、銃を持ったソ軍の兵隊が厳重に監視している。宿舎とは名のみで十分な暖房もなく、ただ

横になるのが精いっぱい、板の寝台毛布一枚、冬期は零下何十度の中、空腹その上に不潔のためシラミに悩まされ、眠りに付くことができない夜が何夜も続きました。風呂もなく一カ月に一回、一時間ぐらい歩いて行く所があり、寒い冬の夜など寒さと空腹、今考へても信じられない苦勞でした。その中でも労働は筆舌に現わすことのできないほど辛かった。夢も希望もなく不安な毎日、生か死かの生活ほど苦しいものはありません。生きる者にとって食物のない辛さは恐ろしいものです。すべて見るものが食べ物に見えてきます。

私は運あつて帰国できたのですが、苦勞に耐えきれず多くの二十歳ばかりの若い尊い命が失われたのです。その遺骨すら帰ることなく寒い凍土、異国の地に寂しく眠っておることを思う時、やりきれない気持と思いに静かに冥福を祈るばかりです。

私の体験から戦争は最大の敵、二度と繰り返してはならないとの強い思いと同時に、平和の大切

さ、命の尊さ、食物の大切さ、苦しい体験を後世に伝える役目こそ私の務めではないでしょうか。最後に、シベリアの極寒の地で無念の死を遂げた戦友の皆様のご冥福を衷心より祈念します。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年七月二十八日

軍隊の略歴

昭和十八年二月一日 関東軍第四国境守備隊

(虎頭) 入隊

昭和二十二年六月一日 舞鶴港上陸復員

復員後の略歴

昭和三十五年四月 福山通運株式会社広島支

店

昭和五十年四月 三葉工業株式会社

昭和五十六年四月 邑智郡森林組合

平成十三年三月 同組合退職

増田さんは生来の誠実な人柄で行政並地域から

厚い信頼を得ておられます。

今まで民生委員九年間、少年補導員二十三年間、交通安全推進委員八年間勤められ、現在は地域安全推進委員として活躍しておられます。

(島根県 本田 吉則)

私の人生記

シベリア抑留苦難の思い出

愛媛県 橘 兵馬

愛媛県温泉郡浮穴村大字井門一一七番地に、父橘熊之亟の長男として大正三(一九一四)年一月十四日生。

家は代々農業を営んでいます。昔は農家の長男は農家を後継していかなければいけなかった。そのため農家の長男は上の学校へ行く必要はないと父に言われ、私は浮穴尋常小学校へ行った。小学校六年、高等科二年を卒業し、それからは夜間中学に徴兵検査まで熱心に通った。

毎年皆勤で賞状と景品を貰った。

徴兵検査は昭和九(一九三四)年、道後公会堂で行った。昔は青年訓練所へも真面目にかよった。そして一通りの軍隊教育は受けていた。私は事情により徴兵検査も一年遅れた。そのため教練をう